
パンダヒーロー

こっこっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダヒーロー

【Nコード】

N3853Z

【作者名】

こっこっこ

【あらすじ】

ある姉妹、グレスとミリアは日本にやってきた。

グレスは野球の助っ人を職業に。

ミリアは麻薬密売人を職業に。

そんな二人は、今日も大金を巻き上げる。

恐れられるヒーロー（前書き）

この小説は作者の妄想です。

あまり本気にしないで読んでください。

恐れられるヒーロー

ベンチでのんびりすごしていた平日月曜日。ネットで「月曜日しね」などと書き込まれる日。あたいはいつものように頼まれた。

「お願いします、グレスさん！」

餓鬼みてえなだっせえ財布から出されたのは諭吉だった。その枚数、4枚。

こんなんであたいが動くかっての。餓鬼はほんとちっせえ。そんなんだからイチモツもちっせえんだよ。

「足りないねえ」

「そ、そんな……」

「ちっぽけな金で動くほどあたいはお人よしじゃないのさ。これは仕事なんだよ。分かるかい？僕ちゃん」

愛棒の金属バッドを餓鬼三人に向けた。諭吉を出した餓鬼はビビって汗だの涙だの流し始めた。

情けねえ餓鬼だ。一からやりなおせてんだ。

「あ、あの…どうしたら助っ人として動いてくれますか？」

「そうだな。全員が全財産出したら考えてやる」

そう言うと餓鬼は目ン玉が飛び出そうなほど目を開いて、声を合わせて「全財産!？」と叫んだ。

真昼間からうるさいったらありやしねえ。

「そこをなんとか……」

「なんとかできねえ。いいか？、餓鬼がごちゃごちゃうるせーんだよ。出さないんならしねえよ」

すると、右側にいた餓鬼がポケットから大急ぎで金を取り出しあたいに寄越した。口角を上げて笑うと、他の二人もさっさと出した。なんだいい餓鬼じゃねえか。

「場所はどこだ、教える」

金属バッドを抱えて立ち上がる。餓鬼はうれし泣きしてありがとう

「ごぞいまずを連呼した。慣れてるものの気持ち悪い。
案内されたそこは、ある中学校のグラウンドだった。」

恐れられるリーダー（後書き）

感想、コメント、インタビュー、自由インタビュー

野球ヒーロー

グラウンドを見ると、他校のチームと試合する様子だった。

餓鬼の一人が歓喜の声で連れてきたぞと叫ぶと、こいつのチームメイトは喜び、相手のチームは悲鳴を上げた。気絶するやつもいたりする。

あたいはここまで有名になつては恐れられるようになったのか。いいことだ。ここまで稼ぎがいいんだし、文句のねえ仕事だ。

「あ、あれ、パンダヒーローのグレスさんじゃねえか！」

「やったぞ！これで県大会へいける！！」

と、餓鬼のチーム。

「嘘だろ！？あのグレスさんが！？」

「お終いだ〜！！」

と、他校チーム。

つたく餓鬼ばかり。ギャーギャーとうるさい。

両チームの監督があたいの元へ近づいてきた。

どちらも愛想の悪い大人で、タバコくさい。おまけにヤク中みたいな目してやがる。ミリアの客か？

「すまんね、これ」

およそ100万。いい額だ。

ふふんと鼻で笑うと、金を渡した監督はチームの方に戻っていった。もう片方の監督は、どうやら他校の方らしい。厳しい目つきであたいを見る。

なんだよ。そんなに勝ちてえか。

「君、どうして来たんだ？まだ未成年がこんなことするんじゃない…」
その言葉にあたしは一瞬でむかつ腹になった。

「ああ？年なんざ関係ねえだろ。金は稼げられればいいんだよ。分かってんのかヤク中ジジイ」

「ヤク中？はっはっは、よく言うねえ。母国から追い出された小娘

のくせに」

ついにあたいは火山のように怒りが大噴火した。

「テメエ死にたいから言ってるのか！？ミリアのヤクがなきやろくでもねえやつのかくせして！こっちは仕事でやってんだよッ！！」

あたいは持っていた金属バッドで監督を頭に殴りつけた。バキッと音がなつて生き血が流れる。

ざまあ見やがれてんだ。

野球ヒーロー（後書き）

嫌いなもの、優柔不断な人間・麻薬・ミリア・サッカー・面倒事

家族構成、母親・ミリア・もう一人の妹

容姿、黄緑色のショートヘア・灰色の目・やや不健康的な色白い肌

服装、茶色いタンクトップ・やや大きめのジーパン・帽子・ゴーグル

職業、野球の助っ人

感想、コメント、レビュー、自由にどうぞ

礼を言われたヒーロー

相手の監督は運ばれた。臨時で来たやつが他校チームの監督を務めるらしい。

うまいこといけばあたいは金をもらったただけだつてのに。畜生。

愛棒の金属バッドを持ってバッターボックスに立つ。表情が見られないように帽子を深くかぶる。離れたところにいるピッチャーを見ると、ガクブルと全身を震わせている。

こりやまたへボいボールを場外ホームランしそうだ。

ついにピッチャーがボールを投げてきた。これは余裕。チビでも打てる。こんな球に本気になって打つあたじゃねえが、油断はいけねえ。

愛棒を振ると、カキンといういい音が響いた。おまけに場外ホームラン。どこまで飛んだかなんて考えるのは面倒だ。昔テレビで見たアニメのヒーローのオープニングテーマを鼻歌で歌いながら、相棒を担いで歩いてぐるっと一周。そして再びバッターボックスへ。

いつもこれの繰り返しだ。だがつまらないことはない。球が打てることがうれしいからそれでいい。

当たり前のようにあたいのチームの勝ち。そしてこのチームは県大会に行けるそう。まあ、そんなこと知らねえけど。

「ありがとうございますグレスさん！」

「うるせえ。あたいはとつととずらかりてえんだ」

門から出ようとすると、チームの全員が帽子をとっては頭を深々と下げ坊主頭をこっちに向けていた。

日本人ってのは礼を言うのが好きなのか。

中学校を出て適当にブラつく。今日は飯食ってだらだらしたい気分だ。

コンビニに向かい、適当におにぎりだの買つ。コンビニを出ると、見たことのあるキチガイの背中があった。

会いたくねえ。あんなキチ女に。

礼を言われたヒーロー（後書き）

感想、コメント、レビュー、自由なコメント

密売ヒーロー（前書き）

グレスの妹、ミアのお話

密売ヒーロー

「お願いしますミリアさん！」
毎日聞く言葉だ。

いや、これがいいのだが。

日本に来て数年。私は密売人になって月何億と稼いでいる。

安くて少ない原料で作り出す私お手製のヤクはどうやら格別らしく、嘘で言った「少ない量で長時間快樂に浸れる」。このことを最初の客がキチガイレベルで信じ、そして広めてくれたおかげでこの大金。「いくら持つてるのさ。それで考えてあげる」

「こゝ、50万ほど……」

貧乏人かこいつ。50万なんかで足りるかってんだ、阿呆め。

と、まあこれも日常の「コマ。ここからが楽しい。

さあ私を楽しませる。私は退屈してる。それをこの仕事で埋めるんだ。

「その50万がお前の全財産か？」

「いえ、まだ他にありますが……」

「どれぐらいあるんだ？」

「あと400万は」
上出来だ。

あとはこいつの家に行って家宅捜査するだけだ。

右腕存在のやつを携帯電話で呼び出す。家宅捜査の準備、臓器売買の準備、その他もろもろ。

このことを携帯電話で話していると、客が禁断症状を起こしている。家に案内することができなくなる前にやらねえと、こりゃ役立たずになる。気休めにオピウムを一錠よこした。それで一時的に正気にさせて、こいつの家へと案内させる。

案内されたのは、できたてほやほやって感じの一軒家、3階建てだった。

密売ヒーロー（後書き）

感想、コメント、レビュー、自由なコメント

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3853z/>

パンダヒーロー

2011年12月15日00時54分発行